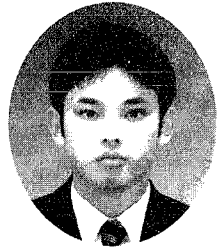


阿部 顕介

海外研修に
参加して

10月31日朝5時に「覚まし」が鳴り、とうとう最初の訪問国ドイツへ行く朝がやってきた。前日の夜までスーツケースを開けたり閉めたりしながら、寝る直前まで持ち物チェック。それでも普段の朝に比べれば目覚めはよく、家族に見送られ、初めての海外旅行への期待と不安を胸に募らせながら、スーツケースを引きずり役場へ一番乗り。11時には成田空港で飛行機に搭乗し、13時間のフライトを経てフランクフルト国際空港へ到着。降り立った私たちを最初に迎えてくれたのは、フランクフルトのオレンジ色の澄んだ夕焼け空と現地のガイドさんだった。ガイドさんの説明によればドイツ人の90%以上はゲルマン系の民族で国土の大半は、森林におおわれ、地勢は概ね平坦であるそう。ドイツは第2次世界大戦



小林 昭一

三村合同海外研修に
参加し感じたこと

今回、海外研修に参加し、初めて海外旅行を経験し、自分にとっては何もかもが新しい発見や驚きの中、7日間を過ごしてきました。今回はヨーロッパということでドイツ・フランスへ行ってきました。まず成田空港を出発して、半日くらいかけてドイツに到着し、バスでホテルへと移動しました。ドイツは思っていたよりも寒くはなく、日本と似たような感じでした。ドイツはあらゆる所に大きなゴミ箱が3つで1セットで分別できるようにして、置かれており、ゴミのリサイクルに力を入れているのが感じとられました。その他にも食事をするために訪れたレストランの近くには、赤十字が管理している、一般の人達の不要になった衣類をリサイクルするために回収する大きなゴミ箱のようなものもありました。

の敗北で東西2つに分割され両国関係は絶縁状態となり、1990年10月東ヨーロッパ各国に広まった民主化運動によりついに東西統一が実現し、現在は16州からなる連邦共和国だと説明して下さった。そんなところから私達の研修は始まり、空港からホテルへ向かうバスの中から見た古く重厚な石造りの建物からヨーロッパの古い伝統文化を感じることができた。

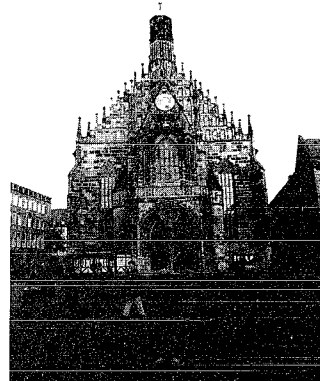
今回、用意された研修テーマは「環境問題行政視察」、「農業行政視察」、「福祉関連視察」、「経済視察」という4つの視察から構成されているが、私なりに感じたこと、思ったことを自分流にレポート作成してみたいと思う。まずはニュルンベルグ市にあるシーメンス社を訪問し環境問題について研修した。シーメンス社は製品の設計段階からリサイクルを考慮することテーマに、1980年代から廃品の引き取りをしている企業で1992年に回収リサイクルリング構想を導入し、今日ではPC、データ処理装置、現金支払い機など自社製品



フランス
セヌ・エ・マルヌ県にて
青空がきれいだったので

廃棄物を引き取っているそう。1993年には3,000tの自社製品の廃品をバダボロン・リサイクルセンターにおいて処理をし、1995年には、数年前に製造されたコンピュータシステムの3分の1を回収し、年間処理量は5,000tを上回るようになったというところから説明していただいた。リサイクル先進国ドイツと言われているだけあって、ゴミ問題（環境問題）について大変意識が高く、そのための教育活動に予算を組み、小学校の授業の中でも資源の有効活用と環境保護の教育の授業があり、シーメンス社でも若手社員の育成のために年に一度リサイクルについて教育されているそう。日本でも最近ゴミ問題は深刻な課題とされているが、リサイクル先進国ドイツを見習わなければいけ

また、ニュルンベルグ市では各家庭にゴミステーションのようなものが設置されており、回収する回数によって金額が違うという料金制度をとっており、ゴミ減量への市民の意識の高さと理解がうかがえました。そして行政の方から民間企業に対して環境問題について指導を行ない、行政と企業が協力して環境問題に取り組んでいました。そのような企業の1つとしてシーメンス社を訪問しました。その企業は、水道メーターなどを作っている会社で日本にも輸出しているそうです。シーメンス社では、工業用排水は特別なフィルターを通して再利用し、工場内で排出される汚染された空気は、工場にあるパイプを伝わって、きれいにして外へ出すという設備になっていました。工場出る産業廃棄物は、厳重に管理され、専門の業者に引き取ってもらっており、環境問題に対して積極的な姿勢をとっており、そういった設備投資にかける金額は、その企業がどれだけ環境問題に真剣に取り組んでいるのか何えました。



ドイツにて
この広場には休日などにはお店が
建ちならんで活気にあふれています

そしてドイツ最終日にはクラインガルデン（市民農園）の視察へ行き、その代表の方から制度の説明をしてもらいました。市民農園とは、郊外の土地を利用して約5m四方くらいに等分し、都心に住んでいてガーデニングがしたい家族や、定年を過ぎて空いた時間でガーデニングを楽しみたいという人達のために、作られた場所です。ここでは営利目的の利用や農業の使用、宿泊などは禁止されており、宿泊などは禁止されており、十分楽しめることができます。日本では見ることがない空間が広がっていました。是非こういった心がいやされる環境は日本にも導入していきたいと思いました。

社関連の説明を受けました。フランスでは、宗教上の関係で一般市民でつくられているボランティア団体があり、行政の方から税金の一部を渡され、そのお金を使って高齢者を楽しませるイベントや旅行を計画し実行する団体があります。それは別に日本でもいう老人ホームがあり、そのホーム内でもイベントが企画されます。そういった環境の中で部屋で閉じこもりがちで老人達にも外へ出る機会を与え、毎年ボランティア団体も行政も思考をこらしてイベントを企画しています。また、フランス人のガイドさんには日本ではあと何年後かには年金がもらえないかもしれない、と言って見たり、ガイドさんはフランスでは物品税が日本と比べ10%以上も高く設定されており、そのおかげで年金に対しては不安はないといっていました。そのことを聞いて、将来的には、日本においても消費税の税率を上げていき、老後も安心して暮らしていける環境が必要だと思えました。また、老人ホームを見学した時には、老人ホームはその階ごとにテーマがあって、海などの絵が飾ってあり、その階ごと

ない部分がたくさんあると思う。ゴミの分別を徹底して行い、リサイクルできるものはリサイクルに回し、限りある資源は有効に使っていく、という姿勢でゴミの減量化とリサイクルに積極的に取り組んでいこうと思う。

現地時間11月3日、ミュンヘン空港から2つ目の訪問国フランスへ移動した。パリの郊外セヌ・エ・マルヌ県で福祉関連施設高齢者対策施設について研修した。見学した老人ホームは140人の高齢者が住んでおり、常時70人の看護婦が勤務している。庭を中心としたコの字型の建物になっていた。1人部屋が113室で27㎡で、2人部屋が6室で33㎡で、家具の持ち込みは自由と説明していただいた。朝食は朝8時に各部屋へ運ばれ食事ができるようにされており、昼食は12時に食堂で全員でコミュニケーションをとりながらできるようになっていて、18時45分に食堂でまた夕食が楽しめるようになっていた。部屋を貸与するの月に26万円という高額を払ってまで入居する価値のある環境や設備の整った、日本とはまた違った老人ホームだと認識

に個性がでていました。そして図書館には、老人でも見やすいようにと、大きな活字を使った本がたくさん置いてありました。そういった点では日本にはないと思うので取り入れていきたいと思いました。ホーム内の各部屋には、高齢者用の設備の整ったベッドが用意されているだけで、その他の家具は持ち込みすることになっており、高齢者にとっては、長年愛用してきた家具が持ってくることで環境が作られるので精神的にも落ち着くことができると思えました。老人ホームにしても日本では見られない点がたくさんあり、是非日本にも導入していきたいと思いました。こういった外国での研修を通じて、日本にはないことを、たくさん見ることができ、もつと文化の違いへ行ってみて、吸収できるものを見つけていきたいと思えました。そういった意味で今回の研修は自分にとって初めての外国と同時に、外国へ目を向けたいという好奇心が生まれてきた研修となり、今回吸収できたことは是非社会に貢献できるように生かしていきたいです。